

# 國學院大學學術情報リポジトリ

Reports : The Practical Report of the Peer  
Reading in Advanced Chinese Reading Classes :  
Aiming at Japanese Translation Based on Context

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002136">https://doi.org/10.57529/00002136</a>

## 上級中国語講読授業におけるピア・リーディングの試み —文脈を踏まえた和訳を目指して

大久保 洋子

### 【要 旨】

筆者は、2018年度に担当した二つの大学の文学部中国文学科における中国語上級講読クラスで、ピア・リーディングの活動を取り入れる試みを行った。本稿はその実践報告である。筆者のこれまでの教学経験に鑑みて、中・上級講読クラスでは、語や句のレベルでは中国語の意味を把握できるが、文章レベルでは把握できず、文脈を理解しないまま、単に語の意味をつなぎ合わせるだけの和訳を行っている学生が一定数存在する。この問題に対して、中国語長文のより深い理解と、その理解を表現する訳文の作成を目標とし、学生自身が反復して思考することによって自ら正答に近づく体験を通して、学生が自分の経験の中から適切な言葉を選ぶことができる能力を育成したいと考えた。実践を通して、いずれのグループも、文脈を読み取った上で適切な訳文に近づくことができた。本稿では、これらの活動の経緯と、2校における実践を通して得た、ピア・リーディング実施において効果が高いと考える諸条件を述べる。

### 【キーワード】

ピア・リーディング、中国語上級講読、授業実践、文脈を踏まえた和訳

### はじめに

筆者は、2018年度に担当した二つの大学における中国語上級講読クラスで、従来の文法訳読法に加えて、ピア・リーディングの活動を取り入れる試みを行った。本稿はその実践報告である。

近年は、教員主導による知識伝達型の教育から、学習者を主体とした学びへの転換が提唱されている。中国語教育においても、コミュニカティブ・アプローチやアクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業実践が報告されている<sup>1</sup>。本稿で取り上げるピア・リーディングの手法も、これらの協働学習の一つとして授業に取り入れる試みが行われている<sup>2</sup>。

これまでに報告されている中国語ピア・リーディングの実践活動は、学生同士で対話しながら協働して文献を読むというものである。その学習効果は、相互作用による理解の深化や、学習者のコミュニケーション能力の向上、社会性の育成のほか、授業における達成感や楽しさを体験すること、クラスメイトから学習上の刺激を得ること等が挙げられている。

これらのメリットが指摘される一方で、学習者の中国語文法知識の限界や、学生間のレベルの格差等により、必ずしも期待した効果が得られない事例も報告されている<sup>3</sup>。

今回の取り組みでは、中国語長文のより深い理解と、その理解を表現する訳文の作成を目標に絞り、ピア・リーディングの実践を行った。この試みを行った理由は、筆者がこれ

まで携わってきた中国語中・上級講読クラスの授業において、「文法的に正確ではあるが、日本語として不自然な和訳」から抜け出せない学生が一定数存在し、彼らがより高いレベルに到達する上で、この現象が大きな課題となっていることを感じていたためである。このような学生の問題点として、語や句のレベルでは意味を把握できるが、文章レベルでは把握できず、文脈を理解できないまま、単に訳語をつなぎ合わせるだけの和訳を行っていることが挙げられる。こうした学生に対して教員が一方的に訳や解説を与え、あるいはヒントを提供することによって正答に誘導し、その場では和訳を完成させたとしても、必ずしも読解力の向上には結びつかない。学生自身が反復して思考し、自ら正答に近づき、到達する体験を通して、教員から一方的に与えられた訳文を覚えるのではなく、学生が自分の経験の中から適切な言葉を選ぶための訓練を行いたいと考えた。

今回、ピア・リーディングを取り入れた2クラスは、いずれも大学文学部中国文学科の中国語上級講読クラスである。履修者は第一外国語として中国語を学習しており、中国語の基礎文法をほぼ習得した学習意欲の高い学生が多い。また学生は初級以降の学習を通して、すでに相互に顔見知りであり、コミュニケーション上の大きな問題はない。よって、ピア・リーディングの大きな効果の一つである社会性の育成やアイスブレイクといった作用は、今回は目標とせず、相互学習による理解の深化のみに注目した。

## 一 クラス編成、レベル、実施時期

取り組みを行ったのは國學院大學（以下、K大学）と二松學舎大学（以下、N大学）における計2クラスで、いずれも中国語基礎文法をほぼ完全に習得した中～上級者向けの講読科目である。2018年度授業において2回ずつ実践した。

【1】國學院大學（以下、K大学）文学部中国文学科3～4年次向け講読科目。履修者は19名。このうち約8割が中国語圏で中長期留学を経験している。HSK 4級以上、中国語検定2級以上合格者は全体の約7割で、ほぼ全員が中国語基礎文法を完全に習得している。実施時期は第8回、第10回授業。

【2】二松學舎大学（以下、N大学）文学部中国文学科3～4年次向け講読科目。履修者は7名。このうち、家庭環境や課外活動などで中国語に触れる機会がある学生が約半数を占める。実施時期は第10回、第13回授業。

## 二 課題文

テキストは『発展漢語（第二版）高級閲読I』（北京語言大学出版社、2011年8月第2版）を使用した。同テキストは各課4～5篇の文章から構成され、それぞれ文章一は精読用、文章二以降は速読用となっている。いずれも簡体字表記で、分かち書きではない。一部の難読漢字を除き、原則としてピンインはついていない。新語、四字成語や一部の語彙

に、英語または中国語またはその両方で語釈がある。

なお、グループワーク実施回以外の授業回では、テキストに従い文法訳読法による文章一の精読と、文章二以降の速読を行った。

ピア・リーディングの課題文は以下の通り。このうち、[b][c]はK大学、[a][d]はN大学で使用した<sup>4</sup>。

注6～8に示した原文のうち、下線部は訳文作成にあたり特に留意するよう指導した部分。事後学習におけるグループ訳の発表時、同部分の訳語に下線を引き、比較の目安とした。

[a] 第10課文章一「数学当歌、人生幾何」、p.83全文<sup>5</sup>

[b] 第3課文章一「宗月大師」、p.19、第5、6段落<sup>6</sup>

[c] 第4課文章一「従丈夫、先生到老公」、p.28、第3、4段落<sup>7</sup>

[d] 第11課文章一「孔子的忠告」、p.92、第3、4段落<sup>8</sup>

### 三 活動内容、手順

取り組みは以下の手順に従って進めた。

#### 【事前準備】

1. 授業に先立ち、課題文を各自で翻訳し、期日までに提出する<sup>9</sup>。
2. 教員が学生の訳文をチェックし、次のA～Dに分類する。今回は、色を分けてラインを引いた。

A：和訳に問題がない。(ラインなし)

B：文意はとれているが、日本語表現に改善の余地がある。

C：文法は理解しているが、文脈を理解できておらず、文意が分からないまま訳語を機械的に置き換えて訳している。そのため、意味が通じづらい和訳になっている。

D：文法を理解していないため、文の解釈が間違っている。

3. 問題点ごとに学生を班分けする。今回は、レベル別の班にした上で、A～Dの問題点を相互に補い合う形のメンバー構成にした<sup>10</sup>。

#### 【教室内学習】

4. チェックを入れた訳文を学生に返却。趣旨説明の後、班分けを発表する。
5. 学生は各班に分かれ、話し合いながら原文に対する理解を深め、より良い和訳を作成する。
6. 教員は適宜、教室内を巡回して進捗状況を確認する。必要があれば和訳のヒントを出す。

#### 【事後学習】

7. 班ごとに代表者を決め、代表者は教室内学習で作成した訳文を取りまとめて提出する。
8. 教員は提出されたグループ訳をチェックし、コメントを入れて、次回の授業で全員に共有する。

## 四 学習の成果

### 課題文 [a] (N大学)

課題文の内容は、中国の数学者、陳省身の小伝であり、文字数は約1000字。原文・和訳ともに長文にわたるため、本稿では割愛する。

事前準備では、学生に全文の和訳を提出させ、教員はすべての文章のチェックを行った。教室内活動では全文を討論の範囲としたため、学生の作業が増え、個別の文章に割ける時間が短くなり、重要構文についての話し合いが十分にできなかった。また、授業内で話し合いが終わらず、訳文作成が間に合わなかった班は、代表者1名が自分で和訳を作成して提出していた。結果として、ピア・リーディングの機能が十分に果たせたとは言い難い。

課題文 [a] の反省を踏まえて、次の活動では課題文を2段落に絞った。グループワークでは2段落全体を討論の対象としたものの、その中で特に注意すべき重要な構文や表現がある文章を数カ所取り上げ（注6～8の原文下線部）、重点的に話し合うよう指導した。

以下、課題文 [b] ～ [c] では、クラス内のある一班の例を取り上げ、下線部の訳について、ピア・リーディングを行う前後でどのように変化したかを見ていきたい。【 】内は筆者の評価。

なお、訳文の引用・公表にあたっては、学生本人から承諾を得た<sup>11</sup>。

### 課題文 [b] (K大学)

学生1：①まさにこの時②彼が学校を経営し私はボランティアの教師をし、彼が食料を施し、私は配布するのを手伝った③私は留学で国を出る前に、彼の庭園も売った④彼の笑顔はまだ赤く、⑤私は彼に仏教学には多くの深い認識があることを言えなかった⑥彼は少し知れば、すぐに少しする。

【②単語・文法の解釈は間違っていないが、文意を読み取れていない例である。③「私」が「彼の庭園」を売ったように読み取れる訳になっている。④「まだ」という訳語が日本語として不自然である。⑤解釈の誤り。⑥文法には沿っているが、文意が読み取れず、意味の通じない直訳になっている】

学生2：①たとえこの時でも②彼は学校を経営し、私は無報酬の教師をしに行き、彼は食糧を施し、私は配るのを手伝いに行った③私が出国し留学する前、彼の庭園も売った④彼の顔はやはり赤く⑤私は彼が仏教学に対してどれほど深い考えがあるのかを言うことはできない⑥彼は少し知っていて、すぐに少し行いに行く。

【①解釈の誤り。②③学生1に同じ。④文意が読み取れず、直訳になっている。⑤解釈の誤り。⑥文意を理解できていないと思われる】

学生3：①この時②彼は学校を設立して私にボランティアの教師をさせ、彼はお金を用いて貧しい人を助け、私はそれらを手伝うことに精を出した③私が留学の為に出国する前、

彼の庭も売った④彼の顔にはやはり活気があり⑤私は、彼が仏教学に対してそこまで深い知識があるとは言えないが⑥彼は物事を少し理解したらすぐにそれをすることができる。

【②ほぼ読み取れているが、文脈はとれていない。一部に解釈の誤りがある。③学生1に同じ。④日本語表現に問題がある。⑤解釈の誤り。⑥適切な訳ができています】

グループ訳：①この時②彼が学校を経営するなら私はボランティアの教師をしに行き、彼が食糧を施すのなら私は配るのを手伝いに行った③私が留学で国を出る前、彼の庭園さえも売った④彼の顔はやはり幸せそうで⑤私は彼が仏教に対してどれほど深い知識があるのか言えないが⑥彼は物事を少し理解したらすぐにそれをする。

【①語意の読み取り不足。③④解釈がややずれている。②⑤⑥は文意を理解した和訳ができています】

全体を通して、②は、二つのフレーズが並列関係になっていることを読み取れない学生が多かったが、グループワークを通して気づきを得、適切な訳に近づいた班が複数あった。⑥は、文意は取れたものの、自然な日本語表現にならず、直訳になってしまう学生が多かったが、ピア・リーディングを通して、複数の班がより適切かつ自然な日本語に近づくことができた。

#### 課題文 [c] (K大学)

学生4：①私たちはランニングシャツに短パンを履いている、(身なりのだらしない) 夫を“先生”と呼ぶことなど想像しがたい②なぜか自分の夫の意味として使われるようになった。

【①②ともに文意が取れており、日本語表現にも問題がない。丸括弧で語釈を補足しているが、できる限りこのような方法は取らず、訳文を通して表現したいところである】

学生5：①私たちは半ズボン、半袖を着た夫を“先生”と呼ぶのは難しいです②なぜか自分の夫のことを専門に呼ぶために使われている。

【敬体(です・ます)と常体(だ・である)が混在している。②は原文「専門」の解釈の誤り】

学生6：①これらの人を私たちが想像するのはとても難しい、私たちは、チョッキを着て半ズボンを履いている成人男性のことを“先生と呼ぶ②どうして自分の夫を呼ぶためだけに用いられるようになったのかはわからない。

【①②とも、解釈が間違っている】

グループ訳：①私たちはランニングシャツに短パンを履いている夫を「先生」と呼ぶことなど想像しがたい②なぜか自分の夫の意味として使われるようになった。

【訳に問題がなかった学生4の訳語がほぼそのまま反映される結果となった。括弧の使い方も日本語表現に合わせて修正された】

課題文 [c] は、一部の班を除き、全体的に文意把握には問題がなかった。日本語表現は半数が適切な訳語を選択できていた。自分たちの知っている語彙の中から文意を表現しようとする試みもみられ、訳語の適否はひとまず措くとして、辞書の訳語にとらわれない、

理解を前提とした訳語を選択しようとしている点で評価したい。

課題文 [d] (N大学)

学生7：①どのような指導者であるかでその部下がどのようなようになるかが決まり、どのような経営者であるかでその従業員がどのようなようになるかが決まります②管理するというのはい一つのバランスを取る技術であり

【①②とも文意はとれているが、訳の硬さが抜けていない】

学生8：①どのような上司がいればどのような部下がいて、どのような社長がいればどのような従業員がいるということだ②管理は一つの均衡がとれる芸術であり

【①直訳であり、文意が伝わらない訳になっている。②文意がとれていないと思われる】

学生9：①上司や社長が大した人間でなければ、部下も従業員もそれ相応の人しか集まらないのである②人をまとめる事とは均衡がとれているテクニックであり

【①やや行き過ぎた訳になっている。②文意が伝わらない訳になっている】

グループ訳：①部下は上司で決まり、従業員は社長次第ということです②管理するというのはい一つのバランスの芸術であり

【①②とも、適切な和訳ができています】

先に示したように、N大学の履修者は中国語ネイティブの環境にある学生が半数を占めていた。こうした学生の一部には、日本語の日常会話表現や中国語の読解にはほぼ問題がないが、論説体などのやや硬めの文章になると、読み取りが不安定になり、日本語表現にも困難が生じるという課題がある<sup>12</sup>。①は、文意はとれていたが、いずれの学生も日本語の選択に苦心していた。参考のため教員の訳を聞きたいとの要望を受け、一部のみ伝えたが、結果としてその影響を受けた意識となった。このような回答の与え方は、今後厳に慎まねばならない。それ以外は、文意を汲んで適切な訳語を選ぶことができた。

## 五 学生による授業評価

N大学の学生による授業アンケートでは、授業の良かった点として、「訳をグループで話し合っつくる点」との回答があった。評価項目のうち、「外国語運用能力を習得できた」については、5段階評価で最高の「5」と次の「4」がそれぞれ回答者の40%、「3」は20%であった。「教員による授業内容の工夫があった」については、「5」が40%、「4」が60%、「授業で得たことの満足度」は「5」が40%、「4」が60%であった。

K大学では、学習支援システム「K-smapy II」を活用した授業評価アンケートを行っており、学生は期間内にスマートフォンやパソコンを使ってシステムにアクセスし、回答することになっている。今回は授業内で回答時間を設ける余裕がなく、授業外の時間を使って個別に回答するよう指示したものの、実際に回答した学生はわずかであった。自由記述欄でグループワークに言及した学生はおらず、同大学では今回の試みに関する学生の有効

なフィードバックが得られたとはいえない<sup>13</sup>。授業内の学生の取り組み姿勢から判断して、みな真剣に作業に取り組み、熱心に議論を行っていたが、実際にそれぞれがどのような学習の手ごたえを得たかについて、知ることができなかったのは遺憾であり、今後の大きな課題である。

## 六 授業実践のまとめ：ピア・リーディング成功に向けた諸条件

以下、2校での実践において、筆者が留意し、効果が高かったと考えられる点をまとめる。これまで見てきたように、今回の活動が今後の学生の読解力と翻訳力向上にどれほど作用するかについてはまだ観察の段階であり、以下の条件が必ずピア・リーディングの成功を導くとは断定できない。またこれらの条件は、あくまで今回の実践の到達目標に鑑みただけのものであり、文法理解やアイスブレイクを目的とした場合は、また別の条件が考えられるであろう。

1. 基礎文法をすべて習得している
2. 学習に積極的である
3. 適切なテキストがある
  - (1) 文学作品などの、コンテキストに依拠した文章である
  - (2) 簡明、平易、短めである
4. 3人程度の班に分ける
5. 弱点を補い合う班構成にする
6. 到達目標を明確にし、全員で共有する

このうち、1は必須と考える。学生間で文法事項の習得度が異なるのは当然だが、あまりに開きがある場合、習得度の高い学生による文法説明に終始してしまい、ピア・リーディング最大の目的である学生相互の気づきが得られない上に、作業負担が一方に偏ってしまう。

2は活発な議論のために必要であるが、実践を行う中で他の学生から刺激を受けてやる気を出したり、班に対する貢献義務を感じて自ら積極性を発揮することも考えられる。このような効果は教員主導型の授業運営では得られ難く、グループワークの大きな優位性といえよう。

3. (1)「コンテキストに依拠した文章」は、文脈を読み取って訳す訓練をするうえで必須である。多くの学生が苦手とするところであり、中級から上級にかけての大きな関門である。これを習得しなければ、より複雑な内容の文章は読み取ることができない。(2)についてはレベル次第であるが、上級への足掛かりとする上では、比較的容易に気づきを得られる程度の平明な文章が望ましい。今回は、中国語らしい文章表現を理解することに重点を置き、複雑な構文の文章は避けた。

4と5は、教員による事前のレベルチェックが必要であるが、スムーズな話し合いを促す上で大切である。これに追加して、学生の気質や性格、人間関係を考えた班構成を考へることも必要だと感じた。仲の良い友人同士を同じ班にすると、雑談に流れてしまい、また内向的な学生同士の場合、話し合いに発展せず、個別作業に終始することになりかねない。

6について、今回の目標は、(1) 文脈を読み取ること、(2) 文脈に合わせて適切な訳語を選ぶこと、であった。目標の共有については、事前学習の提出物に対して教員がフィードバックを行い、不足の点と目指すべき点を明示したことにより、学生は目的意識をもって作業にあたることができたと考えている。その一方で、学生はグループワークの際にどの訳が適切かをラインの有無で判断できるようになっていたため、結果としてこれが正答へリードすることにもなった。今回の取り組みの目的に照らして考えれば、必ずしも最適な方法とは言えない。今後さらに工夫をしていく必要があるだろう。

また、目標設定については、単なる文法項目の相互学習よりも、例えば全員が文意を理解したうえでより自然な日本語表現を目指すといった、やや高めの目標を設定することが、活発な議論につながると考える。クラスのレベルによっては、全員が容易に達成できる目標を設定し、達成感を得させた上で、段階的に目標を引き上げていく方法も有効であろう。

## おわりに

今回は、中国語・中国文学を専攻する学生を対象に、文意の読解とそれを踏まえた自然な和訳を目指したピア・リーディングを行った。課題文に関する相互学習を通して、多くの学生が理解を深め、グループとして正確な和訳に近づくことができた。

ただし筆者は、すべての学生がピア・リーディングを重ねることで自然な和訳ができるようになるとは考えていない。翻訳とは、外国語の読解力のみならず、第一言語の運用能力が極めて大きくかつ重要な役割を占める作業である。教室における中文和訳も同様であろう。第一言語による読書経験や、多様な文章表現に触れた経験が読解力や文章表現力を決定づけるとすれば、それを持たない学生に対して大学の外国語授業で数回のグループワークを行ったところで、劇的な翻訳能力向上は見込めない。このことを認識した上で、筆者があえてグループワークに期待するのは、学生同士で言語表現について話し合うことを通して、言語表現に対する相互の感覚を学び合い、自分自身の言語表現を客観的に認識し、磨いていく体験をすることであり、それを学生間という対等な立場で行うことである。これにより、教員から一方的に知識を与えられる形の学習では得ることができない、知的刺激や気づきを得ることができると考えている。この気づきを個別学習に還元していくことで、より効果的なレベルアップを図ることができるだろう。

今回の取り組みは各校2回にとどまり、この手法による学習が学生個人の読解と和訳にどのように影響していくかについては、探ることができなかった。個別の学生の能力向上

に至るまでには、さらなる継続的な実践と学習が必要であると考えらる。

また本稿では、中・上級講読授業においてピア・リーディングを実施する際に留意した条件の一つとして「基礎文法の習得」を挙げたが、大学によっては、このレベルに到達していない学生も存在すると思われる。また、多くの大学で第二外国語の必修授業が初級段階で終了する中、中国語の中・上級クラスを履修する学生自体が少なく、グループ活動ができない場合もあるだろう。これらの大学では、学生の問題点に応じた方法選択と目標設定が必要になろう。

中国語学習を取り巻くこのような状況の中で、今回、特に國學院大學において、五つもの班に分けて活動をすることができたのは稀有であり、得難い機会であった。筆者がこのような機会を十分に活用できたか、学生にどれほどの気づきを与えることができたかは心もとないが、かねてから課題と考えていた中・上級レベルにおける読解・翻訳能力の向上について具体的な取り組みができたことは、重要な一歩と考えている。今後もピア・リーディングの手法を含め、上級への有効なステップとなる学習・指導方法を学び、機会をとらえて実践していきたい。

#### 参考文献

- 大宅利美「ピア・リーディングの実践報告：第二外国語中級クラスを中心に」『中国語教育』第15号、2017年
- 寺西光輝「中国人留学生と日本人学生による協働学習：中国語文献のピア・リーディングを通して」『中国語教育』第11号、2013年

#### 注

- 1 例えば、胡玉華『中国語教育とコミュニケーション能力の育成：「わかる」中国語から「できる」中国語へ』（東方書店、2009年）など。
- 2 本稿では、授業実践にあたり、大宅利美「ピア・リーディングの実践報告：第二外国語中級クラスを中心に」（『中国語教育』第15号、2017年）、寺西光輝「中国人留学生と日本人学生による協働学習：中国語文献のピア・リーディングを通して」（『中国語教育』第11号、2013年）などを参考にした。
- 3 大宅利美「ピア・リーディングの実践報告：第二外国語中級クラスを中心に」、注2、前掲書。
- 4 課題文が異なるのは、2クラスにおける活動の実施時期と授業進度の違いによる。
- 5 原文は本文に述べる理由により、割愛する。
- 6 課題文は以下の通り。下線と括弧内の丸囲み数字は引用者による。以下同。なお、本課題文 [b] は作家・老舍原作の散文だが、文章はやや改編されている。

到我中学毕业的时候，他已破产了，只剩了那个后花园和一些房子。即使在这个时候，他还是喜欢做各种善事：为穷孩子办学校，把粮食给穷人。就是在这个时候 (①)，我和他来往得最密切。他办学校我去做义务教师，他施舍粮食，我去帮忙散发。(②) 看刘大叔那么热心、那么真诚，我也不再和他辩论，只好也出点儿力了。

在我出国留学以前，他的花园也卖了。(③) 他和夫人、女儿都出家了。以前，他吃的是山珍海味，穿的是绫罗绸缎。现在，他衣食简朴，每日苦修，可他的脸上还是红红的，(④) 笑声还是响亮的。我不敢说他对佛学有多么深的认识 (⑤)，但我却知道他一定是个好和尚，他的学问也许不高，可他知道一点儿，便去做一点儿 (⑥)。

- 7 “先生”是从对成年男性的尊称发展来的，严肃有余，亲热不足。这个称呼在宴会厅、会议室等比较高雅的场所用才合适，而这位“先生”应具备一定的条件：西服革履，最好是一个文化人。我们很难想象，

把穿着背心短裤的丈夫唤做先生。(①)另外,“先生”也不适合用来当面称呼丈夫。

“男人”本来可以用来指所有的男性,不知怎么被用来专门称自己丈夫。(②)它和“先生”正好处于两个极端,显得随便,甚至有些俗气。这个称呼不被文化人接受。还有一点,“男人”也和“丈夫”、“爱人”一样,不适合作为称呼。

- 8 哪个下属会忠诚地追随一个不能胜任自己工作的领导呢?哪个下属会为一个缺乏职业精神的领导效力呢?所以,孔子说的“先有司”,是做好管理工作的第一要义。从一定意义上讲,有什么样的领导就有什么样的下属,有什么样的老板就有什么样的员工。(①)

什么叫“赦小过”呢?孔子的意思是说:金无足赤,人无完人,选用人才要看大局。如果一个人总体上能够胜任你安排的工作职位,那么在一些细节问题上,就应该宽容一些。没有哪个人没有缺点。所以,管理人要做到该严格的地方要严格,该宽松的地方要宽松。管理是一门平衡的艺术(②),谁不能宽容别人,也就不能很好地领导别人。

- 9 両校とも大学の学習支援システムやメールボックスを利用し、オンラインで提出させた。
- 10 レベル別にした理由は、班内で中国語レベルに格差が生じると、レベルの高い学生にのみ作業が集中することになり、相互学習の目的が達せられないためである。同様の理由で、問題点が共通する学生同士を同じ班にすることは避けた。また、それまでの教室内学習を通して把握した学生の性格や人間関係に基づき、同じ気質や傾向の学生が特定の班に偏らないよう、バランス良く編成することを心がけた。

なお今回は、K大学は3～4名ずつ5班、N大学は2班に分けた。

- 11 本稿の構想を始めたのは開講年度終了後であったため、学生への承諾依頼にあたっては、國學院大學教育開発推進機構および両大学教務課各位の多大なるご助力を得た。記して御礼申し上げたい。また、掲載を快諾してくれた学生諸君にも感謝を申し上げる。
- 12 近年、ネイティブ環境にある学生が中国語科目を履修する事例が増加しており、すでに中国語日常会話に支障のない学生に対して、特に初級クラスにおいて教学上どのように対応すべきかの議論がしばしば行われている。筆者は中・上級クラスを担当した経験に基づき、初級段階から中国語文法を学問的に学び、日中両言語について比較言語学的な視点をもって認識する訓練を経ていない場合、中・上級に至って「文意は分かるが訳せない」といった問題が顕在化する例が多いと感じている。ネイティブであればこそ、文法知識の教育は不可欠であると考え。
- 13 ただし、「授業の良かった点」として、「接続詞や副詞なども気をつけて訳をするようになった」との記述があった。